

# 金貨と砂糖—ジョージ・エリオットの「兄ジェイコブ」

谷田 恵司

(平成 15 年 10 月 2 日受理)

## Gold and Sugar: George Eliot's 'Brother Jacob'

YATA, Keiji

(Received on October 2, 2003)

キーワード：ジョージ・エリオット、兄ジェイコブ、金貨、砂糖、サイラス・マーナー  
Key words: george eliot, brother jacob, gold, sugar, silas marner

### I

ジョージ・エリオットの中編「兄ジェイコブ」(執筆1860年、発表1864年)は、この作家の作品中では従来あまり注目されることのなかったものである。エリオットを高く評価していたヘンリー・ジェイムズはこの作品を「とばりの彼方」よりも出来がよいとして、「この物語は全体として優れた読み物である」<sup>1)</sup>と述べているが、この意見にはあまり賛同者はいないようである。一般的な評価は、たとえば、あるエリオット研究者の「あの退屈な話」<sup>2)</sup>という言葉に如実に現れている。また、エリオットに関する同時代の評論を集めた *George Eliot: The Critical Heritage* (1971) では、索引にすらこの作品名は挙げられていない。エリオットは基本的に長編作家であり、またこの寓話的小品にはエリオットの最良の部分、つまり他の長編小説に見られるような迫真的な描写や個人と社会の関係のあり方への真摯な探求などが見られないことが、こうした不評の原因であろう。

しかし近年になってこの作品を見直す傾向が見られてきた。ただし、それはこの中篇を作者の他の長編と同列におくべき傑作であると論ずるというよりは、この作品を作者の伝記的事実との関連や、さらには他の作品(特にこの作品の前に書かれた『フロス河の水車場』)との関連で論じたり、あるいはこの作品にエリオットの時代の社会情勢の反映を探ろうとする見方である<sup>3)</sup>。本論はそうした論点を踏まえううえで、この作品を主に「金貨」と「砂糖」という二つのキーワードを中心に検討しようとするものである<sup>4)</sup>。

### II

「兄ジェイコブ」と長編『サイラス・マーナー』(執筆開始1860年、発表1861年)は、エリオットの作家としての経歴において連続して書かれた作品である。この二つの作品には登場人物や物語の構成要素にいくつかの類似点があり、それを確認することからこれらの作品の比較検討をはじめることができよう。

「兄ジェイコブ」において、フォウ家<sup>5)</sup>の末息子デビッドは、菓子職人として働くことに嫌気が差し、西インド諸島に渡って一旗あげようと、母の蓄えた20ギニーを盗む。精神薄弱の兄ジェイコブは、弟のデビッドが母から盗んだ金貨を地面に穴を掘って隠すところを目撃する。知能の遅れた兄に現場を見られて慌てたデビッドは、甘いものが大好きな兄にキャンディを与え、金貨を地面に埋めておくこととキャンディに変化する、とごまかして難を逃れようとする。そして翌日金貨を掘り起こしたデビッドはなんとか兄を振り切って西インド諸島へ渡る。彼は6年後に帰国して、エドワード・フリーリーと名前を変え、グリムワースという町に菓子店を開業する。その店は次第に繁盛し、フリーリー自身も、自分は実は良い家柄の出身であるとか、おじの遺産がいずれ自分のものになるなどというまことしやかな言葉が信じられて、町の有力者の中に受け入れられていく。やがて彼は富裕な農場主の娘との結婚を目指す。しかし、偽名を使い家族との連絡を絶っていたのに、父の遺産をもらうために名乗り出たことが、結局自分の居場所を家族、とりわけ兄ジェイコブに知らせることになり、それがデビッドの命取りになった。結婚相手の娘が両親とともに彼の家を訪れ、結婚後の生活の取り決めをしているまさにそのときに、

店にジェイコブが現れる。この兄は売り物のお菓子をむさぼり、フリーリー（デビッド）を弟と呼ぶ。さらに、ジェイコブを連れ戻すために長兄までもが店先に現れ、過去を隠しきれなくなったデビッドの結婚話は壊れる。彼は人々の信頼を失い、結局町を去る。

一方『サイラス・マーナー』では、機織職人サイラスは、身体が発作的に硬直して意識を失う、強硬症という障害を持ち、若いころにそれを利用して友人に裏切られる。その後彼は人間不信の守銭奴となり、田舎の村はずれの小屋で孤独な職人として黙々と仕事を続ける。彼が家の床下に蓄えた金貨はやがて地主の息子に盗まれるが、盗人はサイラスの家を出たところで誤って足を滑らせて石切り場の跡の水溜りに転落して死亡する。金貨も同時に水底に沈み、そのまま16年間眠り続ける。金貨に入れ替わるようにして、サイラスの小屋に金髪の子供が迷い込み、彼はその娘を育てる。16年後に水底から引き上げられた金貨はサイラスのもとにもどるが、娘に人間的愛情の対象を見出したサイラスには、もはや金貨への物神的崇拜はない。

### III

この二つの作品のプロット上の類似点としては、埋められた金貨と、主要登場人物の精神的（肉体的）障害という二つの点がまずあげられるだろう。エリオットはこの二つの素材を、当初は短い物語で比較的単純に扱い、そのすぐ後は長編でさらに複雑な構成の一環として扱ったと見なすことができる。その意味では、「兄ジェイコブ」は『サイラス・マーナー』の扱っている素材を扱う準備的試みであったとも考えられよう。

まず、『サイラス・マーナー』の埋められた金貨を見てみよう。前述のように『サイラス・マーナー』での金貨は、最初は人間嫌いの守銭奴の手により、愛玩され死蔵される。盗難の後には16年間の水底での眠りを余儀なくされ、また、その発見の後でも、テキスト中にはどのようにその大金を用いたのかの記述はなく、おそらく娘エビーの結婚資金となるのであろうと思われるだけである。金貨は物神的崇拜の対象から、水底に沈む単なる金属の固まりとなり、そして最後には用途も明示されぬまま、テーブルの上にもまるで場違いな品物であるかのように積み上げられる。貨幣が資本となって自己増殖機能を発揮することのないままで物語は終わるのである。

一方「兄ジェイコブ」では、金貨を盗んだデビッドの

行動は経済活動としてどのような意味があるのかを、まず彼の行動の倫理性との関連の上で検討しておきたい。

母の金を盗むのは確かに倫理的な悪である。現実的には、たしかにデビッド自身も言っているように「母の財産を取るのには窃盗ではない、なぜなら母は息子を告訴しないから」<sup>6)</sup>とは言えようが、本質的にはそれは犯罪として処罰されうる可能性のある窃盗行為である。しかし、父が亡くなった後、行方をくらましていたデビッドにも他の息子たちと同様に父の遺産が渡ることになる。母から盗んだ分を差し引いた形で82ポンド3シリング<sup>7)</sup>が彼に渡される。それは、彼が母から盗んだ行為を、遺産を前払いでもらったかのように扱うことになる。ここにおいて、彼の窃盗行為は、少なくとも親との関係においては一応免罪となったと考えられよう。

彼は母から盗んだ金を元手にして西インド諸島に渡り、一旗あげようとするが、母以外の人間から盗むほどの根性はなく、菓子職人として働く以外に生活の手段は見当たらない。彼はそれもやがていやになり、稼いだ金を持って、6年後に帰国する。ここでは彼は合法的な経済活動に従事していたことになる。もっとも、帰国したときに持っていた金の中には、「他人の不品行を口にしない代わりにもらった金」(77)も含まれていたようであるから、すべてが合法的であったとは言えないだろうが、大半は自らの労働で生み出した資金であると思われる。

次に、彼が帰国後に開いた菓子屋は完全に合法的な経済活動を行う菓子製造所兼店舗である。テキストには一言も触れられていないが、そこで使われている砂糖はもとも彼の滞在していた西インド諸島などで奴隷の労働を搾取して得られた生産物である<sup>8)</sup>。しかし、砂糖はこの当時、いかに非人間的であろうとも全く合法的な経済活動から生まれた商品であった。彼の販売する商品である菓子のせいで、町の婦人たちが料理を怠り、その夫たちの財布が軽くなったとしても、それも経済活動としては合法的なものである。しかし、正当な経済活動であるとしても、その事業者の人間的道徳性が疑わしい場合には、その経済活動自体も、そこで合法的に得られた利益も、倫理的には疑わしいものと見なされる場合がある。たとえば『ベニスの商人』のシャイロックの場合は、合法的な経済行為を営んでいても、その人間性ゆえに、経済活動までもが事業主の道徳性に基づいた倫理的判断を下される。

しかし、グリムワースにおける経済的活動は合法的で

あったとしても、デビッドは人間的には問題のある行動をとっていた。彼は自分の経歴や親族についての情報を偽り、また、おじからの遺産が入るあてがあるという将来の資産の可能性をでっち上げて、資産家の娘との結婚を有利に取り運ぼうとした。最終的に彼が町を去らざるを得なくなるのは、ジェイコブの出現によってそうした虚偽が暴かれたからである。彼の店が経営不振になったりしてその経済活動そのものが失敗したことが原因ではない。経済活動が、経営者の倫理性に基づいて共同体の中で評価され、結果としてその活動が制約を受けたのである。この点ではデビッドは金貨しシャイロックに類似した、正当な経済活動を行う人物像が倫理的基準により社会的制裁を受ける姿であると言える。

さて、埋められた金貨に注目してみよう。「兄ジェイコブ」での金貨はたった一晩で掘り起こされ、デビッドの西インドへの渡航資金となる。ジャマイカでは、彼が思い描いていたように白人であるというだけでちやほやされて成功するという事は、まさに夢に過ぎなかった。やはり地道に菓子職人として働くことしか道はなかったのである。そして、多少はいかがわしい脅迫めいたこともしたようだが、菓子職人としての労働が彼の経済活動の中心であったことは間違いないだろう。6年後には、帰国してグリムワースの町で菓子店を開業するだけの資金を持ち帰った。それならば、彼は母から盗んだ20ギニーを貨幣として十分に活用したといえよう。結局それが開業資金になったのならば、盗まれて埋められた貨幣は、彼によって掘り起こされ、自己増殖を行う機会を与えられ、資本主義社会における最も重要な要素である資本という存在になりえたのだ。

しかしまた、盗んだ金貨を埋めたところをジェイコブに見られてしまったとき、彼は、金貨を地面に埋めておけばキャンディになると、甘い物好きの兄をだまして難を逃れようとした。この言い逃れはその場では結局うまくいき、弟は何とか兄を振り切って西インド諸島へ渡る。けれども、ジェイコブが後に弟の店に突然出現し、彼の菓子店と社会的地位を崩壊させることになるのは、この精神薄弱の兄がキャンディの魅力にとらわれていたからである。甘味の魅力、あるいは呪縛は、デビッドの店を繁盛させて彼の社会的地位を高めるとともに、同時にまた彼の失墜の原因ともなったのである。

## IV

『サイラス・マーナー』と「兄ジェイコブ」の両者に共通する要素の第二点として、肉体的あるいは精神的障害を持つ人物の存在がある。

『サイラス・マーナー』においては、サイラスの病は彼から時間を奪う。彼は強硬症の発作からさめた後では、その間の時間の経過の記憶がない。そのことが原因で彼は若いころに窃盗の容疑をかけられ、婚約者を奪われ、所属していた宗教団体から追放されたのである。その病が、彼が蓄えた金貨にいわば感染し、彼が床下に隠した金貨は、単なる死蔵された貨幣としてのみ存在し、どれほどの時間が経過しても資本として自己増殖することはない。ダンスタンに奪われた後も、水没することで金貨の病は持続し、時間は停止したままである。金貨は水底に沈んだままで、何らかの生産過程にかかわったり、価値の増殖に寄与したりすることはない。この病は金貨からも、サイラス自身からも時間を奪い、金貨は増殖せず、サイラスは村人と人間的になんらのかかわりも持たず、精神的变化を遂げることもなかった。彼が変化するのは金貨が奪われた事件とエピソードの出現とにより、村人との積極的交流が始まってからのことである。

一方、ジェイコブの精神薄弱は、疾病というよりも、生まれつきの障害というべきであろう。彼は最初に「まったく健康で发育のよい白痴」(51)と紹介される。彼の障害による経済的負担を、フォウ家の者が負担する。彼が生まれた当初は両親が負担したのであろうが、作品中では「正直者の」長男ジョナサンがこう語る。「まったく厄介者で金のかかる弟でさあ、ものを食ったり、なんだかんだと、だけでも背おわされた荷物は担っていかなければなりません」(84)

さらには彼の存在は、デビッドにとってはいわば脅迫者となる。その意味でロドスタインが彼を『ダニエル・デロンダ』のグランドコートになぞらえるのは興味深い意見である<sup>9)</sup>。しかし、その脅迫が自覚的に行われているか否かの点では、ジェイコブとグランドコートは全く異なる人物像であるとも言える。

「白痴」という存在はスモールによれば、物語中では一般的に次の二つの機能を持つ構成要素として用いられることが多い<sup>10)</sup>。第一にそれはイノセンスを象徴する存在であり、他の登場人物の悪意や陰謀を対比的に強調する。第二に、精神薄弱ゆえの無知の知、あるいは他の

人物の無警戒により、何らかの秘密の暴露を引き起こすきっかけをなす。

ジェイコブの場合は、まさに秘密の暴露を引き起こす存在として第二点に相当することは言うまでもなく、語り手も彼を、思い上がった人間に神罰を下すギリシャ神話の女神ネメシスにたとえ、この物語をこうユーモラスに締めくくっている。「こうして菓子職人デビッド・フォウとその兄ジェイコブの物語は終わる。この物語は、偉大なるネメシスがいかに思いもよらぬ姿で出現するかを見事に示すものであったと言えるよ」(87)

しかし、第一点のイノセンスを示す側面はジェイコブには見当たらない。ジェイコブを強烈に突き動かしているのは単純な欲望である。彼が当初、弟デビッドに金貨のことでだまされるのも、後にデビッドを追い求めて彼を破滅に導くのも、その原動力は甘味への強烈な欲望である。

過去を隠し、変名を使っているとはいえ、まっとうに商売をして繁盛しているデビッドの店に、兄ジェイコブが出現し、弟からまたキャンディを求める。ジェイコブはその店の繁栄だけでなく、店主の社会的上昇を保証する結婚の見込みをも崩壊させた。それは弟の持つ金貨の増殖の機会を奪った行為である。金貨をキャンディに変化させようとすることで、貨幣から未来の可能性を奪おうとした行為である。資本主義社会の中心をなす資本として活躍している貨幣に、地中に戻ってキャンディに変化しろと求めるのと同様である。社会の変化を押しとどめ、田園的寓話的な世界のままであれと願う行動である。シャトルワースが指摘しているように、ジェイコブには時間の観念が欠如していて「永遠の現在に生きている」<sup>11)</sup>のだ。こうして、ジェイコブとサイラスは、貨幣から時間を奪い、その自己増殖を停止させるという点において、同様の機能を果たす登場人物であると言える。その機能が、この二人の精神的肉体的障害から発生していると言えるのも、二人の類似点と見なせるだろう。

これに対して、デビッドは貨幣に十分な時間を与え、増大させた。彼は母から盗んだ金を、資本という自己増殖する運動体にまで進化させたのだ。兄のせいでグリムワースの町にはいられなくなってしまったが、いずれまた別の町で開業し、おそらく繁盛することだろう。彼のモラルは明らかに疑わしいし、町の婦人らが彼の店で出来合いの菓子を買うようになったところで、人々の日々の生活が本当に向上したのか、それは疑問が残るところ

だろう。商品経済の普及が必ずしも生活の質の向上につながるわけではないことは言うまでもない。だが、デビッドが貨幣の機能を十分發揮させ、金貨に自己増殖の機会を与えたことは間違いない。彼は貨幣に未来に向かって成長する時間を与えたのである。

## V

甘味への欲望が、砂糖という商品への需要を生み、西インド諸島におけるサトウキビ生産の原動力となる。甘味への欲望が帝国主義的植民地支配や奴隷制度を生み、大英帝国の繁栄を支えている。砂糖という、植民地の生産物が、大量生産により価格が低下して下層階級の食卓にのぼるようになったのはこの時代のことである。ちなみに、低価格の甘味製品の普及は庶民の栄養状態の低下につながったという<sup>12)</sup>。また、この物語において甘味への欲望は、お菓子好きの精神薄弱の兄の姿をとって、若き菓子職人兼菓子店経営者の経済的企てを失敗させた。ここでは甘味は、ジェイコブとデビッドの関係というミクロの事実においてのみ描写されていて、砂糖が大英帝国の繁栄の基盤の一つであるというマクロの事実への言及は全くなされていない。しかし、砂糖の果たすこの二つの役割はいわば表裏一体であり、どちらも結局は甘味という肉体的快樂の追求が資本つまり金の動きとどのように関わるかを示すものである。

さてデビッドが西インド諸島行きを思い立った原因の一つが「インクルとヤリコ」の物語である。R・スティールが『スペクテイター』に書いて知られるようになり、その後いくつかの劇の種本となったこの物語では、インクルというロンドンの商人がアメリカにわたり、そこでアメリカインディアンのヤリコという娘に愛される。しかし、インクルはヤリコを結局奴隷として売り払ってしまう。

そう考えた結果、賢明で儉約家の若者は、ヤリコをバルバドスの商人に売り払った。気の毒な娘は同情を引こうとして、自分のおなかには彼の子が宿っている、と告げたが、彼の方はそれを聞いてかえって売値を吊り上げただけであった<sup>13)</sup>。

文明国の若者は、自らの行動の非人間性を全く認識しないままに、自分に愛情を示した先住民の女性を売買可能な存在とみなす。肉体的(性的)快樂の追求と支配と

が、愛情という基本的人間関係に取って代わる。そして、そうした肉体的欲望の追求が、(妊娠しているから売値を吊り上げるという)経済的利潤の追求に直結しているのである。ここにも、砂糖とともに、この一見単純な物語をイギリス帝国主義の時代の状況と強く結びつける要素があると言えよう。

さて、西インド諸島では砂糖はすなわち商品として換金される品物である。ジェイコブの意識の中では、金貨は地中に埋めておけばキャンディに変貌する物質である。さらに、グリムワースの町の人々が甘味を欲するからこそ、デビッドの店は繁栄する。ここでは、やはり砂糖は換金される。しかしデビッドがその金を得るには、自分の商品を町の人々の家庭に侵入させなければならない。主婦が自分で菓子を作るのをやめて彼の店から買うことにしたとき初めて、彼は町の住人の甘味への欲望を金銭に換えたのである。甘味への欲望に突き動かされてジェイコブがデビッドの店に侵入したのと同様に、デビッドは人々の甘味への欲望を家庭の外に引き出し、商業化した。ゲマインシャフトの世界がゲゼルシャフトの世界に変貌してゆく。デールの言うように、デビッドが象徴するものは伝統的社会への商業主義の侵入である<sup>14)</sup>。

こうして砂糖の生み出す甘味への欲望が、金貨に代表される貨幣への欲望と交差する。甘味は商品として販売され、金貨となって菓子製造職人を潤す。また、金貨は地中でキャンディとなって彼を没落させる。帝国主義的發展を遂げ大英帝国として世界を支配しながらも、その発展のおかげで安価になった砂糖製品のせいで、国民の栄養状態はかえって悪化したという事実がここで想起される。欲望は發展の原動力であり、かつまた破壊の原因ともなる。「兄ジェイコブ」の寓話的世界では金貨と砂糖とが交換可能かつ正反対の役割を持つ存在となって欲望を生み出し、価値を増殖するとともに破壊をも招くのである。母の金を盗んだ息子が結局罰を受けるというこの物語は、単なる因果応報の寓話にとどまらず、田園的世界への商業主義の侵入や帝国主義的植民地支配のあり方、そして、欲望が生み出す繁栄が破壊と背中合わせであることなどを、砂糖と金貨という帝国主義と資本主義の二つの代表的な存在を軸に鋭く描き出したものとして読むことができる、豊富な読みの可能性を秘めたテキストであると言えよう。

## 注

- 1) Henry James, "The Lifted Veil" and "Brother Jacob" (1878) in Gordon S. Haight, ed. *A Century of George Eliot Criticism*, 1965, London: Methuen, 1966, p. 131.
- 2) W. J. Harvey, *The Art of George Eliot*, London: Chatto and Windus, 1961, p. 212.
- 3) たとえば、ボーデンハイマーはこの作品に作者エリオットの伝記的事実を重ねて読み込む。当時、『アダム・ビード』などの初期作品の本当の作者は自分だと主張する人物が現れ、正当性の主張を繰り返していた。ペンネームを用いて、一部の関係者にしかその実像が知られていなかったエリオットは、非常に困惑していたのである。ボーデンハイマーはこの作品について以下のように述べている。「これは、ユーモアや隠微的な遊び心にあふれた作品である。他人の話を読みそれをフィクションとして書いたという非難を受けていた作家は、そうした言いがかりに対して、盗んだ金貨を金色のキャンディに変えようとして失敗して逆に手ひどいしっぺ返しを受けるような人物像を作り出してみせたのだ」(Rosemary Bodenheimer, *The Real Life of Mary Ann Evens: George Eliot, Her Letters and Fiction*, Ithaca: Cornell University Press, 1994, p. 149.)
- また、Peter Allan Dale, 'George Eliot's "Brother Jacob": Fables and the Physiology of Common Life', *Philological Quarterly*, 1985 Winter; 64(1), pp. 17-35はこの作品を主に『フロス河の水車場』と対比して論じている。
- さらに、当時の社会情勢を中心に読み込んだものとしては、次のようなものがある。Susan De Sola Rodstein, 'Sweetness and Dark: George Eliot's "Brother Jacob"', *Modern Language Quarterly*, 1991, Sept; 52(3), pp. 295-317.
- 4) 筆者は先に、下記の論文において『サイラス・マーナー』における貨幣と疾病の問題を論じた。本論ではそこでの検討を土台にして「兄ジェイコブ」を論ずるため、『サイラス・マーナー』に関しては論点が重複する場合があることをお断りしておく。『サイラス・マーナー』における貨幣と病]『ジョージ・

- エリオット研究』第4号(2002年11月) pp. 31-46.
- 5) この Faux という名前には、「虚偽の」という意味と、さらには(「狡猾な、ずるい」という意味合いがある)「狐」という暗示も含まれていると考えられる。
- 6) *The Lifted Veil, Brother Jacob*, ed. Helen Small, Oxford: Oxford U.P., 1999. p. 51. 以下、本書からの引用はカッコ内にページ数のみを示す。
- 7) どうしてこの金額になるかがテキスト中では十分説明されていないが、以下のような計算である。父親からの遺産は100ポンドであるが、デビッドはすでに母から20ギニー盗んでいる。母はもともと息子に3ギニーあげるつもりだったのだから、結局、100ポンドから17ギニー(17ポンド17シリング)を差し引いた残りの82ポンド3シリングが彼に渡されるのである。
- 8) Sally Shuttleworth, 'Introduction' in *The Lifted Veil and Brother Jacob*, ed. Sally Shuttleworth, Harmondsworth: Penguin Books, 2001, p. xxxvi 及び Rodstein 参照。
- 9) Rodstein, p. 314.
- 10) Helen Small, 'Introduction' in *The Lifted Veil, Brother Jacob*, Oxford: Oxford U.P., 1999, p. xxxiii.
- 11) Shuttleworth, p. xxxvii.
- 12) Rodstein, p. 300.
- 13) Richard Steel, *The Spectator*, Tuesday, March 13, 1711, in Henry Morley, ed. *The Spectator*, London: George Routledge and Sons, n.d., pp. 21-22.
- 14) Dale, p. 23.

### Abstract

Although most literary criticism correctly focuses on George Eliot's novels, there is a tremendous benefit in placing those novels in a critical dialogue with her short fiction. An exploration and examination of recurring themes in both the short stories and the novels allows the reader reasonable access to both the macrocosmic and microcosmic filters of Eliot's personal and social perceptions.

This paper places *Silas Marner* and 'Brother Jacob' in such a dialogical relationship to enhance a fuller understanding of both. Indeed, there is already a chronological continuity between them. Eliot commenced work on *Silas Marner* immediately after penning 'Brother Jacob', and the motifs of lost gold and mental instability (or deficiency) resonate fully in both texts. It is only when they are placed in conjunction with each other, however, that the reader becomes aware of this continuity through a polarizing, through a mirroring rather than a simple doubling or echoing, within the texts.

From Silas' lost gold and catalepsy to the recovered gold and portrayal as 'Nemesis' of the simple-minded village idiot in 'Brother Jacob', and from the idiot's insatiable appetite for candy to the role of sugar in Victorian Britain, this paper examines Eliot's perceptive social and psychological interests whilst simultaneously bringing critical attention to an important, though frequently overlooked facet of Eliot's work.